

2022年2月6日 礼拝説教要旨

詩編講解説教96「主は来られる」

詩編96：7～13、ヨハネ黙示録22：12～17

詩編第96編は10節に「主こそ王」とありますが、王の即位の歌と呼ばれるもので、神さまが王として即位されることを喜び讃える内容となっております。この「王」は一国の王というよりは、今日のところには「諸国の民」という言葉が繰り返されます（7、10、13節）。また「全地」（9節）「国々」（10節）、「世界」（10、13節）とあるように、国を超えた全世界の王として神さまが即位されること。またそれだけではありません。11節以下に「天よ、喜び祝え、地よ、喜び踊れ、海とそこに満ちるものよ、とどろけ。野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め、森の木々よ、共に喜び歌え、主を迎えて」（11～13節）とあるように、神さまのお造りになられた自然も含めあらゆるものが神さまを王として迎え、喜び祝うという非常に壮大な光景が描かれています。

「王」は支配する者、治める者ですから、神さまのご支配が全世界の造られたすべてのものに及ぶことを讃える歌がこの詩編96編です。実はこのような内容の詩編はこれだけではありません。少し前ですが47編、またすぐ前の93編、95編、またこの後に読みます97編、99編も神さまが全世界の王として即位することを讃える内容になります。なぜ詩編はこのように王という存在を意識させるのでしょうか。一つにはこの詩編の書かれた時代背景が強く影響していると言えます。詩編の多くはバビロニア捕囚がその背景にあります。何よりそこには国を奪われ他国の王に支配される経験があります。今日のところに「供え物を携えて神の庭に入り聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ」（8～9節）とありますが、これはイスラエルの人々にしてみれば、例えば捕囚の時代バビロニアやペルシャといった強国の王に貢物をする光景を思い浮かべたでしょう。またその後もローマ帝国の支配があります。そのようにイスラエルは他国の王の支配を嫌というほど経験してきました。またそれは同時に異国の神々に仕えることを意味しております。そのような様々な支配の中で自分たちの本当の支配者を見失わずに生きることがイスラエルにとって切実な問題でした。これらの王の即位の詩編は、そのような様々な支配から救われ、まことの神さまのご支配に入ることへの切なる憧れと理解することができるでしょう。

「大いなる主、大いに賛美される主、神々を超えて、最も畏るべき方。諸国の民の神々はすべてむなしい」（4～5節）とあります。そのような異国の神々を超えて、すべてを造られ、支配されるまことの神さまの存在を示す一方で、ここでは「諸国の民の神々はすべてむなしい」とあるように偶像を拝むことの空しさが示されています。どういう支配者に仕えるか。それがわたしたちのアイデンティティーを形成し、その生き方に直接表れてきます。国家もそうでしょう。どういうリーダーが国を動かすかでその国のあり方、将来の方向性が定まるのです。先月は成人式がありましたが、新成人の6割が自分の将来に希望が持てないというアンケート結果がありました。二十歳を迎えた前途洋々な若者の半分以上が将来に悲観的なのです。それは今のパンデミックのことも影響しているのかもしれませんが。あるいは経済問題、政治不信、国際問題、少子化問題、温暖化など、あらゆる問題が影響しているということが考えられます。しかしその根本においては、その国の人々が何に支配されているか、どういう王に仕えているかに関係しています。

もう少し身近な問題を考えてみましょう。この日本社会は明らかに偶像礼拝の社会と言えます。一つには天皇制に象徴されるかもしれませんが、「ヒト」を神として拝むことが一般的です。また使徒言行録にパウロがアテネで「知られざる神々」を祭った祭壇を見て驚いた話（使徒言行録第17章16節以下）がありますが、まさにその状況がこの国にはあります。自分たちが何を拝んでいるのかも分からずに、「みんなしているから」という理由で色々な神々を拝む。やれパワースポットだ、占いだと騒立ち、評判がいいと聞けばすぐに飛びつき、得体の知れない「モノ」を神として拝む。そういう「ヒト」や「モノ」に支配され振り回されることを良しとする社会なのです。ヒトを神格化することも、そのヒトの人格を含めて神としているわけではなく、物言わぬ偶像として神格化するのです。天皇が政治的発言をすることを嫌うのは何よりそのことを示しています。それは物言わない方が政治家や国民にとって都合がいいと考えるからです。

そういう「モノ」を神とし、王として仕える時に、人はどうなるのでしょうか。その生き方もまた神をただ自分に都合のよい存在として利用したり、人をモノのように扱うような生き方になるのです。それが今の世の中の現実に現れているでしょう。ますます人はお互いを尊重することができなくなり、強権的な仕方で相手を支配しています。この世にあるあらゆる暴力、差別や偏見もすべては偶像礼拝の罪から来るということを心に留めなければなりません。そして今こそまことの生ける神さまのご支配に立ち返ることが求められています。まことの神さまのご支配にある時にこそ「世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない」（10節）のです。

何よりこの詩編には、まことの王として神さまが来られる約束があります。「主は来られる、地を裁くために来られる。主は世界を正しく裁き、真実をもって諸国の民を裁かれる」（13節）この主の到来こそ、イエス・キリストの到来を指し示していることは言うまでもありません。主は言われました。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1：15）キリストの到来こそ神の国、神さまの王としてのご支配の到来です。

13節には「裁く」という言葉が繰り返されます。この言葉には「治める」という意味もあります。正しい公平な裁きが行われることは、不正がなく国が正しく治められていること条件です。その正しい裁きを神さまは行われます。だからこそキリストは十字架で死んでくださいました。そして三日目によみがえり、罪に打ち勝って、わたしたちを偶像の支配から解放してくださいました。モノではなく、生ける神さまに仕える新しい命を与えてくださったのであります。終末において、キリストは再び来られ、その完全なるご支配をもたらしてくださいませ。それがわたしたちの将来です。この信仰に生きる限り、将来を悲観することはありません。こういう時代、こういう国だからこそ、まことの王、神さまのご支配に生きる望みをしっかり持ち続けましょう。